

ある むぜお

府中市郷土の森博物館だより

al museo

2018年6月20日

No.124



ハケ沿いの府中用水と田んぼ 昭和30年（1955）頃、現在の西府町で撮影された。

もくじ

- 1-2 水とともにくらしたむかし
その1…田んぼと用水路
- 3 最近の発掘調査
武蔵府中熊野神社古墳の西側
- 4-5 NOTE 府中宿の成立に関する一考察
- 6 展示会案内
企画展 東京最古の旧石器
- 7 展示会案内
特別展 水とともにくらしたむかし
- 8 府中の身近な昆虫絵巻
①雑木林の昆虫酒場
- 9 平成29年度寄贈・寄託資料一覧・
利用状況・新刊案内
- 10 史料に見る府中の事件簿
①秣場騒動

水とともにくらしたむかし

人びとは日常生活をはじめとし、さまざまな形で水と関わり合ってきました。このコーナーでは、「水」をキーワードに、昭和30年代以前の府中のくらしを4回シリーズで紹介します。

その1…田んぼと用水路

府中を東西に走る崖線（ハケ）沿いの府中用水。国立市青柳の多摩川に取水口があり、全長は約6km。この水路は現役の農業用水で、流れに沿って緑道（遊歩道）が整備されてもいます。しかし現在、写真の田んぼは無くなり、住宅や道路となっています。

水とともに くらしたむかし



その1…田んぼと用水路

府中では6月、遅くとも7月初旬くらいまでに田植えを終わらせます。ゆえに、この『あるむぜお』が発行される頃、府中の田んぼの多くは田植えが終わっていることでしょう。

府中には、通称ハケと呼ばれる崖（府中崖線）が東西に走っています。それを境にして、標高の高い北部は「ハケ上」、低い南部は「ハケ下」と呼ばれています。ハケ下一帯は、かつて水田地帯でした。

田植えをするにはその前にやらなければならないことがあります。まず固くなっている土を掘り起こす「田起し」を行い、雑草を土の中に練り込み肥料にします。そして水を引き入れ、土をさらに細かく耕し、平らにする「代掻き」を行って、やっと田植えができます。現在では耕運機やトラクターでできてしまう田起しや代掻きも、かつては下の写真のように、馬や牛の助けを借りて行う重労働でした。

田んぼに水が絶えず流れてこない、代掻きはもちろん田植えもできません。日本各地を見れば、川の流れに沿って土地に傾斜があり、水の確保が比較的容易な田んぼも多くありますし、水が地中から湧き出る沼地のようなところもあります。しかし、府中市域には多摩川以外に豊富に水が流れる大きな川はありません。常に水が湧き出ている沼等も多くありませんでした。

たとえば多摩川に田んぼが隣接していたとして



馬を使って、水を入れた田んぼで代掻きをしている様子
昭和15年（1940）頃、是政で撮影

も、直接そこから水を引き入れることはなく、多摩川上流から用水路を巡らし、水を引いていました。

府中の用水路のなかでも主要なものとして知られているのが、「府中用水」です。国立市青柳に取水口があり、そこからほぼ府中崖線に沿って西から東へ流れ、最終的に調布で多摩川と合流します。ハケ下の用水路の多くは、府中用水の支流で、網の目のように広がっています。

なお、田んぼに水を引くにも多くの手順があります。用水路を管理する用水組合で、水を引くスケジュールは決められます。各農家はそれに合わせて草刈りや清掃等を行い、用水路を保全管理するとともに、水が自分の田んぼに来る時期を逆算して一年間の農作業計画を練る必要があります。濁水ともなれば、水の管理はさらに大変になります。用水路を維持管理しつつ、流れる水をどう分配するかは、とても重要な問題なのです。

宅地化が進んだ府中では、用水路の流れや、田んぼで代掻きをする光景を見る機会が少なくなりました。最近では用水路を地中に埋めこんで暗渠にし、その上を緑道（遊歩道）にしているところもあり、張り巡らされた用水路も目にふれることが少なくなっています。しかし、府中に広がる用水路と田んぼは、決して失われた風景ではありません。まだまだ探せば少なからず残っています。

そしてそんな風景が広がる場所は、自然が残る場所だともいえます。カエルが鳴き、アメンボ等の虫もいて、豊かな自然の残る府中の風景を形成しているのです。

府中用水は、平成18年（2006）に日本を代表する用水路として「疎水百選」の一つに選ばれています。むかしながらの風景が残っていることが評価されたのですが、こうした風景は府中用水に限ったものではありません。府中のどこにそんな場所があるのか、6～9月の田んぼや用水路に水が豊富な時期に、探してみたいかでしょうか？
(佐藤智敬)

武蔵府中熊野神社古墳の西側

西府町二丁目 府中市ふるさと文化財課 西野善勝



復元された熊野神社古墳と発掘された西側隣接地

JR 南武線西府駅の北約 500 m に国史跡武蔵府中熊野神社古墳があります。今から 1350 年ほど前の飛鳥時代に築造されたものです。

この古墳は 2003 年の発掘調査で見つかり、その遺構の真上に当時の姿を復元しました。熊野神社の社殿北側にあり、墳丘の高さは約 6 m、幅は約 32 m です。

古墳の形が特徴的で、全国的に見ても発見例の少ない上円下方墳です。墳丘は 3 段構造になっていて、最上段が丸く、下 2 段が四角です。最上段と 2 段目は河原石で覆われています。1 段目は、古墳を囲むように切石による縁石が並んでいます。

古墳が復元された後の 2013 年から 15 年にかけて、古墳西側隣接地の確認調査を実施しました。

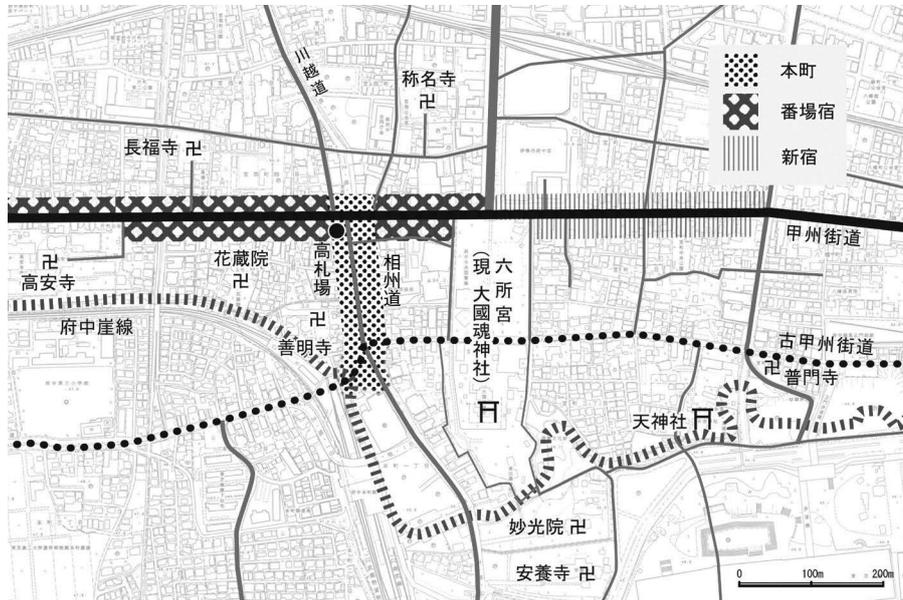
古墳北西部分では、墳丘 1 段目の角付近の縁石が発見されました。復元されている 1 段目の縁石を延長した位置に、切石の一部が残っていました。地表面のすぐ下で発見された切石は、大部分が崩れていましたが、ある程度のまとまりがみられ、切石の列を推定することができました。この発見により 1 段目の角を含めた全周が切石で縁取られていたことがあらためて確認できました。

古墳のすぐ西側では、古墳構築土の土取り跡と考えられる遺構が発見されました。この土取り穴状遺構の大きさは、墳丘 2 段目の規模に近いもので、南北約 25 m、東西は 17 m 以上、深さは 2.2 m あります。古墳寄りではローム層をえぐるように掘った跡も確認されています。

これらの調査成果を踏まえて、今後、墳丘 1 段目の復元を含め古墳西側の隣接地が古墳公園として整備される予定です。古代の府中に思いを馳せる場として活用されることを願っています。



発見された墳丘 1 段目の切石片



17 世紀後半以降の府中宿の概念図

▼ はじめに

江戸時代、甲州街道の宿場町だった府中宿は、本町（現 本町）・番場宿（現 宮西町）・新宿（現 宮町）の3か村で構成されていました。各村の位置は上の図のとおりですが、これは17世紀半ばに甲州街道のルート変更が行われた後のものです。それ以前の「古甲州街道」（上図の・・・）はもう少し南方を通っていますので、宿場のエリアも異なっていたはずです。

府中宿は、本町、番場宿、新宿の順で段階的に整っていき、甲州街道のルート変更後に町並みが完成したと、近年まで考えられていました。ところが、昨年度開催した企画展「甲州街道と府中宿」に伴う調査において、今までの説を改めなければならぬ史料があることに気が付いたのです。

▼ 宿場の拡張

それは、番場宿の旧家・矢島茂右衛門家の文書群に含まれていました。江戸時代初期の当主が記したものを、後に書き写したと考えられる史料で、後半が欠損した断簡です。正確な作成年等は不明ですが、その内容を意識すると、

私は代々府中町の庄屋をしている者です。以

前は百姓43人で伝馬役などをつとめていましたが、甲州街道の宿場となり負担が増えたので、慶長15年（1610）に大久保石見守長安へ私の親が訴えました。その結果、伝馬衆が100人余りに増え、それを3つに分けることになりました。そして采女・清左衛門の2人が新庄屋に命じられ、私とあわせて3人が庄屋に定められたのです。となります。

つまり、この史料によると、府中宿は3つの村が一緒になって出来たのではなく、慶長15年に拡張し、3か村に分けられたということになるのです。なお、「庄屋」という役名は、わずかですが他の史料でも用いられていますので、江戸時代初期には「名主」と併用されていたのかもしれませんが。

▼ 史料の信憑性

この断片的な情報が、江戸時代の府中宿の成立を解明するカギとなる可能性があります。その内容の信憑性が気になるところですが、次のような理由から、事実だと判断して良いのではないかと考えています。

まず、矢島茂右衛門家は、江戸時代初期に番

場宿^{むらやくにん}の村役人をつとめていますので、府中宿の成立に関わる史料が伝わっていても、不思議はありません。

次に、これを記したのは庄屋であり、かつ大久保長安に伝馬役の窮状を訴えた人物の息子です。すなわち、当時の事情をよく知る関係者による記録だといえます。

そして最後の理由は、内容の一部が他の史料と符合しているからなのですが、それについては検証を加えつつ、これからお話ししていきたいと思えます。

▼ 記載内容の検証

① 慶長 15 年以前の伝馬屋敷数

文化 5 年 (1808) に府中を訪れた大田南畝^{なんぼ}の著書『玉川披砂』と、天保元年 (1830) 完成の地誌『新編武蔵風土記稿』では、番場宿に残る文禄 3 年 (1594) の「府中御縄打伝馬屋敷水帳」について触れています。これは太閤検地の際のもので、「伝馬屋敷」という文言^{もんごん}から、府中に宿場があったことがわかります。『新編武蔵風土記稿』は、「伝馬屋敷」の数は 46 軒だったと記録しており、この数は茂右衛門家の断簡に記された 43 人という数と非常に近いのです。ちなみに、江戸時代後期の史料で確認できる府中宿の伝馬屋敷は「百五軒半」ですので、これは大久保長安に上申して伝馬衆が 100 人余りとなったという記述と一致します。

② 庄屋と村名

『玉川披砂』には、元和元年 (1615) の「茂右衛門宿」の「年貢割付状」についても記されています。そこには「茂右衛門宿トハ今ノ番場宿ナリ (中略) 寛永十三年ヨリ番場宿ト有之」とあり、番場宿が寛永 12 年 (1635) まで茂右衛門宿と呼ばれていたことがわかります。また、『新編武蔵風土記稿』には、新宿がかつて「采女宿」と称されたと記されています。

茂右衛門と采女は、茂右衛門家の史料に記された庄屋の名前です。残念ながら、もうひとりの庄屋・清左衛門の名を冠した村名は、これまでに見たことがありません。しかし、江戸時代初期の村名に、3 人中 2 人の庄屋の名前が用いられているのは、府中宿の成立を考える上で興味深い事実ではないでしょうか。

③ 合宿ではない府中宿

甲州街道には、複数の宿場で 1 宿の役割を果たす合宿が、いくつもありました。例えば高井戸宿は上・下 2 宿、布田五宿は 5 つの宿場でひと月を分担しています。

府中宿も、本町・番場宿・新宿が交代で伝馬役をつとめていました。しかし、『甲州道中宿村大概帳』などの宿場のリストを見ると、高井戸宿や布田五宿とは異なり、府中宿が 3 つに分かれていることはまずありません。これは、システムとしては同様なのに、府中宿が合宿だと認識されていなかったからだと考えられます。

このことについて常々不思議に思っていたのですが、もともと 1 つの宿場が 3 つに分かれたと考えれば納得がいきます。つまり、合宿とは成立の仕方に違いがあったと推測できるのです。

▼ 残る疑問

江戸時代の府中宿の成立や時期について、新たな可能性が見えてきましたが、まだ問題が山積みです。甲州街道のルート変更前、府中宿がどの範囲に広がっていたのかも定かではありません。本町エリアは発掘調査で 15 世紀後半以降の陶磁器が多数出土していますので、江戸時代以前からの宿場だったと考えて間違いないでしょう。しかし、番場宿と新宿については、「古甲州街道」に沿っていたかどうか分からないのです。

そもそも、慶長 15 年に増加した 60 人余りの伝馬衆は、どこから来たのでしょうか？ 想定できるのは、宿場の範囲を広げ、その住人を指定したことと、移住者を募り新住民に伝馬役を担わせたことです。番場宿は宿場の番所があったことに由来するという説がありますので、そこから範囲を推測できるかもしれません。新宿については、住民が江戸時代初期に移住してきたことを示す史料が残っているのですが、いかんせん、それ以上の糸口が見つからないのです。

ここまで、ひとつの史料をもとに推論を積み重ねてきましたが、結局分からないことだらけです。府中の江戸時代初期については、史料がほとんど残されていないため、解明できないことが多いのが現状です。その中で、茂右衛門家の史料に記された内容は、新たな指針となると考えています。今後の史料調査や発掘成果をとおり、ここで紹介した推測が確証になったら、改めてご報告したいと思えます。

企画展 東京最古の旧石器

7/7(土)～10/28(日)

会場：本館 2 階企画展示室



3万5000年前の石器群

東京最古っていつ? 府中市の北端、都立多摩総合医療センターの敷地にある武蔵台遺跡では、都内最古級の石器が多量に出土しています。その年代はおよそ3万5000年前。後期旧石器時代の初頭にあたります。

3万5000年前の石器が出土したのは、地表下約4m、立川ローム層のなかです。立川ローム層は富士山の火山灰に由来する土層です。南関東には、このローム層がとても厚く堆積していますが、東京最古級の石器はその最下層に近いところから出土しています。立川ローム層の下には武蔵野ローム層と呼ばれる古箱根の火山灰に由来する地層が堆積していますが、これまでにこの地層から石器が出土したことはありません。したがって武蔵台遺跡出土の石器は、東京最古の石器と言えるのです。

武蔵台遺跡のすごいところ 実は、東京最古級の3万5000年前の石器を出土している遺跡は、武蔵台遺跡だけではありません。武蔵台遺跡は多摩川の支流である野川の源流近くにあるのですが、野川や仙川など周辺の河川の流域では同時期の遺跡が点々と確認されているのです。

このように書いてしまうと、武蔵台遺跡はありふれた遺跡になってしまいますが、そうではありません。1981～82年の発掘で約3,000点、その後も断続的に発掘が行われ、6,000点を超える石器が出土しているのです。全国最大級の圧倒的な出土量を誇るのが武蔵台遺跡なのです。

石器群の特徴としては、定型的な石器が少ない点が挙げられます。これより新しい年代の石器になると、定型的な石器が普通に作られ、使われるようになります。そしてもう一つ、少なくない数

の石斧を含んでいることも大きな特徴です。刃先を磨いた石斧もあります。大型品が多く、森林の伐採や動物の骨をたたき割るといった用途が想定されています。このように武蔵台遺跡は、3万5000年前の生活を物語る貴重な遺跡なのです。

当館は、武蔵台遺跡出土品のすべてを保管しています。最初に出土品が移管されたのは1998年でしたが、その後の発掘資料も保管しています。実は、98年以来、当館の考古部門で最も利用件数が多いのが、武蔵台遺跡の3万5000年前の石器群です。関東の旧石器時代を語る上で欠くことのできない資料として、各地の博物館の展示会に出品されたり、書籍に写真が掲載されたり、研究のために利用されたりしているのです。

28年振りに最新成果を 今回の企画展は、2015～16年に行われた最新の発掘調査の出土品も交え、発掘を担当した東京都埋蔵文化財センターとの共同事業として実施します。

当館では、開館間もない1990年、武蔵台遺跡の旧石器を中心に据えて、特別展「氷河期の狩人―武蔵野台地の旧石器」を開催したことがあります。それから28年振りに、旧石器時代を扱う展示会となります。武蔵台遺跡出土の3万5000年前の石器は、日頃、常設展示室で紹介していますが、今回は最新の出土品や、ふだん収蔵庫にしまわれている石器も含めて展示構成します。

ケースのなかは石器ばかりです。ちょっと見ただけではただの石ころですが、その石ころは、まさに大昔の私たちの祖先が作り、使ったもので、彼らのさまざまな工夫や、行動の一端を読み取ることができます。ちょっと足を止め、じっくりと石器を見ていただければ幸いです。(深澤靖幸)

水とともに くらした むかし

7/21 (土) ~ 9/2 (日)

会場：本館 1 階特別展示室

人はいかなるときも、水がなければ生きていけません。府中の人びとも、さまざまな形で水と関わってきました。

府中市全体に水道が通じたのは昭和 33 年 (1958) のことでした。それからは、水はともかたんに手に入るようになりました。しかし、そうなる前の水は、いまよりもっとムダづかいできない貴重なものでした。日々のくらしのなかでは調理や入浴、洗濯などにつかうのは現在でも変わりませんが、蛇口をひねって出てくるものではありませんでした。井戸を掘って水を地下からくみ上げたり、雨水をためたりして、大事につかっていたのです。

水がなければそもそもできない仕事もあります。川から用水路に水を引いて米を栽培する農業、水の流れて水車を回すことによって行う、精米や粉挽きなどです。また、川を舞台とした活動もあります。投網や釜で魚を獲る漁業などです。水そのものを利用したり、水の中にある資源を活用したりと、その関わり方はさまざまですが、いずれも水があってはじめて成り立つものです。

その水が足りなくなれば一大事でした。人工衛星を用いた天気予報がなかったむかしには、いつ雨が降るか分からず、渇水はいま以上に死活問



用水から水田へ人力で水を入れる「踏み車」。からだを竹で支えて足で水輪を回す。動力ポンプ導入以前に使用されていた。

題でした。だからこそ、日照りが続くと、雨乞いのおまつりをして、雨が降ることを真剣に願ったのです。

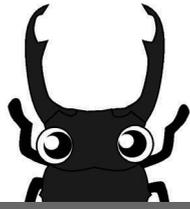
このように、水にまつわるむかしのくらしを記憶するさまざまな資料が、博物館には数多く残されています。そこで今回の展示では、江戸時代から昭和 30 年代頃までつかわれてきた水にまつわる道具を通して、府中におけるくらしと水とのかわりを紹介したいと思います。普段は展示できない大型の資料もたくさん展示されますので、お楽しみに。
(佐藤智敬)



文字通り魚を一網打尽にするための「投網」を使った魚獲り。

府中の身近な

昆虫絵巻



① 雑木林の昆虫酒場

当博物館園内をはじめ、市内には特徴的な環境が豊富です。緑の後退が著しい東京の市街地であるにも関わらず、浅間山や段丘崖の斜面、多摩川の河原と言った場所を有し、それぞれの土台を成す植物群を目当てに、昆虫の集まる基盤が確立しています。豊かな植生に飛び込んで来る昆虫は、市内の至る所で活動し、様々な生活戦略を駆使しながら都市生態系を構築しているのです。本シリーズでは、身近な市内の昆虫を題材に、いくつかの場面を紹介していこうと思います。

市内至る所に酒場あり、今宵も賑わう横丁の民…日々目に映る夕方から深夜にかけての光景です。それは我々人間社会の一コマと思いきや、実は昆虫の世界にも類似の日常があるのです。人が集う居酒屋とは異なりますが、甘い香りに誘われて、日夜常連客が集う雑木林の昆虫横丁です。

クヌギ・コナラを主体とする浅間山の雑木林を筆頭に、市内の落葉広葉樹は、多くの昆虫が餌とする食樹です。本来の住処であった山間部では、原生林・二次林を問わず伐採が進み、昆虫の生活にはあまり適さないスギなどの針葉樹が植林された為、都市部へと拠点を移してきた連中もここに数多く集まります。浅間山や段丘はもちろん、公園や街路樹など、樹木の多い府中の市街地は最適の活動場所を提供しています。特にこれから夏を迎えるにあたっては、さらに樹木から振舞い酒のサービスが始まるのです。

6月に入ると、樹木の生育が活発になり、カミキリムシやガの幼虫に食害されたクヌギなどの幹からは樹液が出始めます。樹液は、シロスジカミキリなどが産卵のために傷つけた跡や、コウモ



リガやボクトウガの幼虫が穿孔した孔の出入り口周辺を癒すために、樹木自身が分泌する物質です。樹液に含まれる成分には、傷口を塞いだり病原菌を撃退したりする効果があります。夏の雑木林を散策すると、甘酸っぱい香りを感じることがありますが、まさに樹液が発酵したアルコールの匂いと言うわけです。この樹液に誘われてゴマダラチョウなどのタテハチョウ類、カナブンなどの甲虫類、そしてスズメバチなどが集まります。この時期は夜行性のコクワガタでも昼間にやって来ることがあり、食害されて幹にできた穴をよく見ると、稀にヒラタクワガタが入ってくることもあります。

梅雨が明けると本格的な夏になり、樹液酒場は常連客で賑わいます。夜になるとカブトムシはもちろん、他にも夜行性のスズメガやキシタバなどのガ類、ウスバカミキリやコメツキムシなどバラ

エティーに富んだ昆虫が観察できます。酒場となるのは古くて太いくヌギやコナラが主で、林の奥深い所より、林縁の大きな木に開店しています。よくよく見ると客の力関係があるようで、夏の夜8時～10時頃では、カブトムシとクワガタが特等席を狙って壮絶バトルを展開します。混雑を避けて、

カナブンやキマワリは日中から早々と来店、スズメバチやアシナガバチもこの時間帯に集まって来ます。蝶の仲間には甲虫やハチと言った猛者連中に圧倒され、隅に追いやられてしまいましたが、行動範囲が広く、小さな隙間にストロー状の口を差し込み、ライバルの口が届かない樹液を頂戴する術を知っています。また一方で、木の孔に潜むボクトウガの幼虫が、酒場に集まる体の柔らかい昆虫を引き込んで食べてしまうなど、酒場の客をつまみにする暴挙に出たりもするようです。

さまざまな昆虫模様が垣間見られる樹液酒場は、絶好の観察ポイントです。酒場が見つからないからと言って、むやみに木を傷つけても樹液は出ないので、故意に木へ危害を加えないようお願いいたします。

(中村武史)

平成 29 年度
寄贈・寄託資料一覧

平成 29 年度
利用状況

No.	寄贈・寄託者 (敬称略)	資料名	分類	数量	受入
1	鈴木 寿美恵	報国国債	歴史	2点	寄贈
2	浅見 一郎	京王線関係資料	歴史	一括	寄贈
3	小野 喜久江	白木隆英家文書	歴史	134点	寄贈
4	小野 喜久江	白木隆英家文書Ⅱ	歴史	一括	寄贈
5	鈴木 洋	「日帰り 婦人子供ハイキング」チラシ	歴史	1点	寄贈
6	東京都埋蔵文化財センター	武蔵台遺跡発掘調査資料	考古	一括	移管
7	鈴木 寿美恵	ポケットコンピューター	民俗	1点	寄贈
8	片町念仏講	念仏講道具	民俗	一式	寄贈
9	瀧本 和生	レコード	民俗	93点	寄贈
10	府中第一小学校	学校印	教育	7点	寄贈
11	村野 晃一	村野四郎遺品 (ほか)	村野	一括	寄贈

区分	有料		減免 (障害者・ 4歳未満等)	合計	
	一般	団体			
博物館観覧者 開館日数 305 日	大人	147,882	4,395	40,724	193,001
	子供	25,488	12,735	52,542	90,765
	小計	173,370	17,130	93,266	283,766
上記のうち プラネタリウム観覧者 投影日数 161 日	大人	18,905	1,223	2,339	22,467
	子供	11,323	5,626	5,043	21,992
	小計	30,228	6,849	7,382	44,459

※プラネタリウムは、更新工事のため10月から休止しました。

 新刊案内

★『府中市郷土の森博物館紀要』31号 300円
学芸員他による研究報告・論文集です。

- ・東京都武蔵台遺跡出土の石棒の石材について
- 縄文時代中期終末の大型石棒の製作と流通に向けての
基礎的研究 - [山本典幸・柴田徹]
- ・府中御殿覚書 - 発掘成果の再検討を中心に -
[深澤靖幸]
- ・武蔵国分寺の近世縁起を読む [小野一之]
- ・くらやみ祭「大太鼓の饗宴」の発祥と発展
[下村盛章]

★府中市郷土の森博物館ブックレット19 500円
『徳川御殿@府中』

徳川家康が鷹狩の際、休憩や宿泊に利用した府中御殿。
その謎に、古文書や古記録、発掘情報から迫ります。

★府中市郷土の森博物館ブックレット20 500円
『新版 武蔵府中くらやみ祭』

最新の情報をふまえ、2004年発行のブックレットを
全面改訂。武蔵府中くらやみ祭を理解するための決定
版です。

★府中市内家分け古文書目録18 300円
『大國魂神社「武蔵総社文庫」目録』

武蔵総社だった六所宮(現 大國魂神社)に収集・所
蔵されていた典籍のうち、江戸時代から明治時代初期
に刊行・筆写された2,661点を、CDに所収しました。

※新刊は、本館1階ミュージアムショップにて
発売中です。

資料をご寄贈ください!

博物館では、府中に関わる資料を集めています。
博物館に寄贈しても良いという方がいらっしゃいま
したら、ご一報ください。

- ★ 昭和40年代以前の家電製品
- ★ 府中にかかわる古写真
- ★ 養蚕や信仰にかかわる資料
- ★ 府中で出土した土器や石器など



★「あるむぜお」は定期購読できます!★

「あるむぜお」の送付ご希望の方は1年単位で承り
ます。4回分の送料328円(切手でも可)を添えて、
受付カウンターでお申込みください。

※当館HPでも「あるむぜお」をご覧ください。

史料に見る府中の事件簿

①秣場騒動



府中に残る史料から、さまざまな事件を紹介するこのシリーズのトップを飾るのは、「秣場騒動」。江戸時代中期、「正徳の治」で知られる新井白石が、著書『折たく柴の記』で取り上げ、事件に関わった勘定奉行と評定所留役が処分を受けることになる一大事件です。

『折たく柴の記』によると、この一件は是政村(現 是政)と下小金井村(現 小金井市)が、「馬の草刈場」を争ったことから始まりました。

秣場とは、肥料の刈敷や牛馬の飼料となる草木を刈り取る原野で、数か村が共同で利用していました。江戸時代の人びとにとって、用水とともに、村の生活に関わる重要な場所です。その利権を巡り、村同士の争いに発展することも少なくなかったのです。その中で、白石が特にこの事件を重く捉えたのは、紛争の規模の大きさと、評定所の不手際の多さからでした。

まずは、騒動の経緯を下小金井村の訴状から見てみましょう。最初の襲撃は正徳5年(1715)7月6日と7日、仕掛けたのは是政村です。約80人が凡そ50匹の馬とともに下小金井村に乗り込み、粟や稗、竹、草を刈り取って行ったので、下小金井村が代官所に訴えました。9日の朝、代官所からの召喚期日を是政村の名主へ伝えたところ、今度はその日のうちに上染屋村(現 白糸台)・下染屋村(同)・車返村(同)・人見村(現 若松町)が加わり、5か村で下小金井村へ押し寄せてきたのです。代官所からの出頭命令を無視して暴挙に及んだその数なんと1,400~1,500人。馬約300匹とともに、弓・鎗・鉦・鉞を手に、ほら貝を吹き、杉・檜や雑木57,000本を伐り取って行ったと記されています。さすがに、この数はかなり誇張されていると思いますが、武具を携え、合図のほら貝を吹くなど、合戦さながらの様相を呈しています。

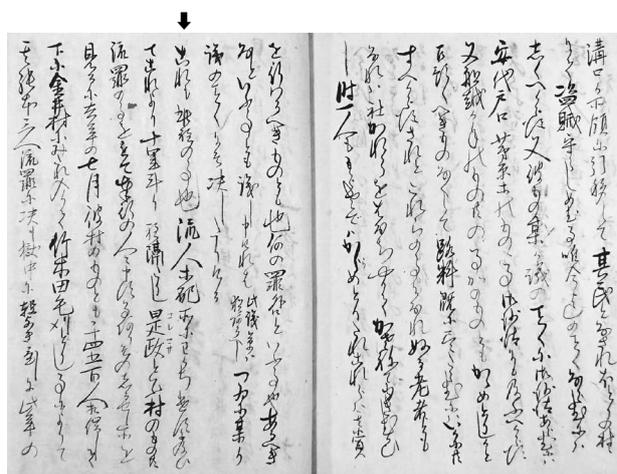
この後、5か村の人々は評定所の裁許を受け、首謀者3人が流刑、4人が追放刑を命じられました。そして、5か村からの過料30両が下小

金井村へ渡され一件落着…、となるところで、この騒動には続きがあります。

翌年正月11日、伝馬町の牢に火の手が及び、事件の首謀者2人がこの機に乗じて逃亡したのです。そして、その事実は残りの1人が配流になるまで、老中等には報告されませんでした。調査の結果、この事件に関する不手際がいくつも見付かり、勘定奉行の伊勢伊勢守は將軍への拝謁停止、評定所留役の5人は免職となりました。幕府の公務日記である『柳営日次記』には、「狼藉すでに世の常ならず」とあり、この事件を一般的な村落間の争いと判断したことが大きな誤りだと記されています。

中世社会では、村が武力により自らの利権を守る自力救済は、正当な行為として認められていました。この慣習は、豊臣秀吉により法令で規制され、江戸幕府も裁判での解決を命じています。ところが、5か村は代官所の召喚を拒否し、徒党を組み、武器を持って他村を襲撃したのです。白石は、將軍の御膝下近くでこのような事態が生じたことに大きな衝撃をうけ、評定所の処罰は軽すぎると苦言を呈しています。もともと、伊勢伊勢守の処分は將軍家継の逝去をうけ、10日もたたずに解かれていますので、他の幕閣の面々が白石ほど重大に捉えていたかどうかは、疑問の残る所です。

ところで、この「秣場騒動」は、本当に「世の常」ならざる特別な事件だったのでしょうか？ 当時の人びとは、自身や村の権利を守るために全面的に公的権力に依拠していたのでしょうか？ 今後このコーナーに掲載する江戸時代の事件から、考えてみたいと思います。(花木知子)



『折たく柴の記』「秣場騒動」部分 当館寄託「武蔵総文庫」